

年報

名古屋大学大学院人文学研究科
教育研究推進室

2019

目 次

巻頭言

名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室室長 池内 敏 i

I 教育研究推進室の活動報告 1

1. 大学院生支援事業 1

1-1 研究発表支援事業一覧（2019年度） 1

1-2 フィールド調査プロジェクト一覧（2019年度） 2

1-3 フィールド調査プロジェクト報告書

- | | | |
|-------------------|--|----|
| 林 順 | 伊勢湾周辺地域における
弥生墳墓出土の穿孔土器・赤彩土器の機能と地域性 | 3 |
| 井上隼多 | 猿投窯出土須恵器の3Dデータベース構築 | 5 |
| 加藤真生 | 日露戦争の疾病史的研究
——赤痢・腸チフス流行構造の解明と対策の実態把握を中心に | 6 |
| KOROTINSKIS Igors | 薩摩藩と琉球王国が支配する「琉球国」
——近世奄美諸島の島役人の実態分析を通じて | 7 |
| 李 璐 | 中国人日本語学習者による間接発話行為の理解 | 8 |
| 清水麻里奈 | 中エジプトの動物墓地からみる聖獣信仰の様相について | 9 |
| SHAHBAZI Yaser | ペルシア語を母語とする日本語学習者における
日本語のテンス・アスペクト習得の横断的研究 | 10 |
| 晏 梓郁 | 出土した瓦からみた南詔国中後期の国家構造 | 11 |

2. 教育研究推進室主催の行事（FD・ワークショップ・その他）（2019年度） 13

II 人文学研究科の教育・研究活動 14

1. 教員の著書（単著）一覧（2019年度） 14

2. 教員の自著紹介 15

- | | |
|--------------------------------|----|
| 河西秀哉『平成の天皇と戦後日本』人文書院 | 15 |
| 佐野誠子『怪を志す——六朝志怪の誕生と展開』名古屋大学出版会 | 16 |

III 各種データ 17

巻 頭 言

2017（平成19）年4月に名古屋大学大学院人文学研究科として発足してから、3年が過ぎました。教育研究推進室も引き続き業務を継続し、大学院生等の研究や教員の教育・研究に対し、支援を行っております。また、これらの活動全般の評価に必要な、各種データの収集・分析も進めているところです。

大学院生等に対しては、「フィールド調査プロジェクト」及び「研究発表支援事業」による経済的な支援だけでなく、後期課程の院生に対する学術振興会特別研究員への応募説明会や模擬面接、博士研究員に対する科研費申請時のアドバイスも行うことができました。上記2種類の経済的支援事業では、昨年度も予算的に大変厳しい状況ではありましたが、計19名の院生に助成金を支給することができました。研究科再編以降、入学してくる学生の資質は確かに多様化しておりますが、学生たち自身が特別研究員として採用される、あるいは科研費等の研究費を確保できるような、高水準の教育を引き続き展開できるよう、今後も努力していきたいと思う次第です。

教員に向けたFD等ワークショップの開催につきましては、昨年度も盛況というわけにはいかず、課題として検討していかなければならないことを猛省しております。大学を取り巻く状況の変化により教員はますます多忙になってきており、特に今年に入ってから全世界に猛威を振るうCOVID-19により、さらに時間やエネルギーを消費せねばならなくなってきました。このような状況を考えますと、高度な研究活動を基盤とした質の高い教育を支えるためには、新たにもたらされた状況に対応する体制を探る時期に来ているのではないのでしょうか。今こそ、どこにどの程度の力を配分するのがもっともふさわしいかを組織として練らねばならないのではないかと思います。

今年度も2019年度の活動報告といたしまして、『年報』2019をここにお届けいたします。名古屋大学大学院人文学研究科の教育研究活動状況を広く皆様に知っていただくとともに、ご理解・ご意見を賜ることができましたら幸いです。

名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室室長
池内 敏

I 教育研究推進室の活動報告

1. 大学院生支援事業

1-1 研究発表支援事業一覧（2019年度）

氏 名 (専攻・分野・専門) 学年※	発表題目 (発表言語)	研究集会の名称 開催地 (都市名・国名)	研究集会会期 (本人発表日)
馮 亜静 (日本語教育学) 3 年	中国語を母語とする日本語学習者による擬音・擬態のオノマトペの軽動詞付加と副詞としての使用の習得 (日本語)	日本語教育学会春季大会 つくば国際会議場 (茨城・つくば市)	2019年 5 月25～26日 (5 月26日)
HOANG Thi Lan Phuong (日本語教育学) 1 年	ベトナム人日本語学習者による漢字語の翻訳における音韻類似性と使用頻度の影響 (日本語)	日本語教育学会春季大会 つくば国際会議場 (茨城・つくば市)	2019年 5 月25～26日 (5 月26日)
田 泰晃 (映像学) 3 年	消費社会転換期のサブカルチャーとメディア—1970～80年代の雑誌メディアを中心に (日本語)	カルチュラルスタディーズ学会 「カルチュラル・タイフーン」 慶応義塾大学三田キャンパス (東京・港区)	2019年 6 月1～2 日 (6 月1 日)
李 戴賢 (言語学) 1 年	日韓語の「相対」名詞修飾節における推論の役割—「短絡」の補正に関して (日本語)	関西言語学会第44回大会 関西大学千里山キャンパス (大阪・吹田市)	2019年 7 月13～14日 (7 月14日)
潘 沁 (日本文化学) 3 年	Reversed reality: Landscape representations in Shinkai Makoto's animated films and the realism in animation (英語)	Inter-Asia Cultural Studies (IACS) International Conference シリマン大学 (ドゥマゲテ市・フィリピン)	2019年 8 月1～3 日 (8 月1 日)
梶川瑛里 (映像学) 2 年	Filling the world with noise: An auditory community in modern Japanese animation (英語)	Inter-Asia Cultural Studies (IACS) International Conference シリマン大学 (ドゥマゲテ市・フィリピン)	2019年 8 月1～3 日 (8 月1 日)
龐 龍傑 (言語学) 3 年	中国語の談話標識「这么说吧」と英語の定型表現 so to speak の対照—関連性理論の観点から (日本語)	第20回日本認知言語学会大会 関西学院大学 (兵庫・西宮市)	2019年 8 月5～6 日 (8 月6 日)
馬 静雯 (日本語学) 3 年	近世の白話小説訓訳本における左訓の性格—『遊仙窟』との比較から (日本語)	第23回東アジア日本語教育・日本文化研究学会国際学術大会 九州看護福祉大学 (熊本・玉名市)	2019年 8 月24～26日 (8 月25日)
楊 慶慶 (文化人類学) 3 年	隠元の禅学解釈に関する一考察—後水尾天皇との書簡を例として (日本語)	第4 回東アジア日本研究者協議会国際学術大会 福華文教会館 (台北市・台湾)	2019年 11月1～3 日 (11月2 日)
伊藤亜紀 (日本語教育学) 3 年	「～と思って」による応答は何をしているのか—相互行為における「～と思って」の機能 (日本語)	第1 回日本語プロフィシエンシー研究学会国際大会 (第12回 OPI 国際シンポジウム) 大連外国語大学 (大連市・中国)	2019年 11月2～3 日 (11月2 日)
金 京 (国際コミュニケーション) 4 年	中国人はなぜアイスランドへ行くのか? —アイスランドにおける中国人移民の移住過程に関する分析 (中国語)	International Studies for the Studies of Chinese Oversea (ISSCO) 暨南大学 (広州・中国)	2019年 11月8～11日 (11月9 日)

※本支援事業の採択者は、すべて博士後期課程（当時）の学生である。

1-2 フィールド調査プロジェクト一覧（2019年度）

氏 名 (分野・専門) 課程※	プロジェクト題目	調査訪問機関 (所在地)	調査月
井上隼多 (考古学) 後期	陶器窯跡群出土須恵器の3Dデータベース構築	陶磁資料館 (愛知・瀬戸市)	7～2月
清水麻里奈 (西洋史学) 前期	中エジプトの動物墓地における聖獣信仰の考古学的研究	アコリス遺跡 (テヘネ村・エジプト)	12～2月
加藤真生 (日本史学) 後期	日露戦争の疾病史的研究—赤痢・腸チフス流行構造の解明と対策の実態把握を中心に	日本赤十字豊田看護大学 (愛知・豊田市)・陸上自衛隊衛生学校 (世田谷区)・東京大学 (文京区)	8～11月
林 順 (考古学) 前期	東海地域における弥生・古墳移行期の墓域編成原理の変遷についての考古学的研究	埋蔵文化財センター・安濃図書館 (津市)・文化財保護センター (岐阜市)・埋蔵文化財調査センター (愛知・弥富市)・文化財収蔵庫 (愛知・稲沢市)・歴史民俗資料館 (岐阜・大垣市)	10～11月
KOROTINSKIS Igors (日本史学) 後期	薩摩藩と琉球王国が支配する「琉球国」—近世奄美諸島の島役人の実態分析を通じて	歴史資料センター黎明館 (鹿児島市)・和泊町歴史民俗資料館 (沖永良部島)・県立図書館 (那覇市)	10月
SHAHBAZI Yaser (日本語教育学) 後期	ペルシア語を母語とする日本語学習者における日本語のテンス・アスペクト修得の横断的研究	テヘラン大学 (イラン)	5月
李 璐 (日本語教育学) 後期	中国人日本語学習者による間接発話行為の理解	西安外国語大学 (中国)	10月
晏 梓郁 (東洋史学) 前期	出土した瓦からみた南詔国中後期の国家構造	南詔国時代の遺跡 (雲南省・中国)	8月

※本プロジェクトの採択者は、全て2年次（当時）の学生である。

伊勢湾周辺地域における弥生墳墓出土の穿孔土器・赤彩土器の機能と地域性

林 順 考古学分野・専門 博士前期課程2年

本報告書では、2019年度フィールド調査プロジェクトによる助成の下で行ったプログラム「東海地域における弥生・古墳移行期の墓域編成原理の変遷についての考古学的研究」の成果について述べる。

弥生時代から古墳時代にかけて築造された墳墓からは、しばしば土器が出土する。こうした土器は墳墓における儀礼行為の痕跡として残されたものと考えられるため、その属性や出土状況に着目することで、儀礼の実態や墳墓築造主体同士の関係性に迫ることが可能となる。特に、今回検討の対象とした穿孔土器、赤彩土器については、他の築造主体との序列化を図るために使用されたという指摘が従来なされてきており、両者とも墳墓という場において被葬者の社会性を表出する機能を有していた可能性がある。しかも、今回フィールドとした伊勢湾周辺地域（三重県域：櫛田川流域～愛知県域：豊川流域）においては、これらが墳墓から出土していること自体は報告されているものの、その全体的な出土状況や属性についてはほとんど整理されていない。そこで本プロジェクトでは、伊勢湾周辺地域を対象とした上で、墳墓の規模や墳形といった遺構的要素も加味しつつ、穿孔土器・赤彩土器が墳墓においてどのような機能を果たし、また伊勢湾周辺地域内における遺跡の地形上の纏まり（＝小地域）ごとにどのような特色を見せるのかについて検討を行った。

今回の調査では、発掘調査報告書に記載されている内容の整理と併せ、土器の肉眼観察による情報（穿孔タイミング、穿孔箇所、穿孔方向、赤彩範囲）の抽出を行い、小地域ごとにそれらの情報を統計化し比較した。具体的には、伊勢湾周辺地域に所在する84遺跡を対象とし、そこから出土した穿孔土器266点、赤彩土器359点についてその属性を整理した（うち、実見した資料については表1参照）。

その結果、穿孔土器・赤彩土器の属性のうち、その存在・多寡と、穿孔方向の複雑性については、多くの小地域において遺構的要素と相関することが明らかとなった。このことは、階層を表示しようとする意図が不動産の遺構においてのみならず、動産の遺物においても表れていることを示すと考えられる。従って、穿孔土器・赤彩土器が小地域内において階層表示として使われていた可能性を指摘することができる。

また、穿孔土器・赤彩土器の諸属性を小地域ごとに比較していくと、例えば赤彩土器の器種構成の違いなどで顕著であるが（図1）、小地域ごとの差異が見出せる場合もあることが分かった。しかし、こうした差異は伊勢湾周辺地域全体の傾向を大きく逸脱するものではなく、単なる割合の違いによるものであるため、基本的な儀礼についての認識は伊勢湾周辺地域全体で共有されながらも、実際の儀礼に当たっては各小地域の裁量に委ねられたと考えられる。

一方、調査を進める中で、複数穿孔土器（図2）や特殊な技法を示す土器（図3）など、特定の小地域のみからしか出土しない土器も存在することが判明した。このことから、穿孔土器・赤彩土器は小地域内のみならず、小地域間において差異化・序列化を図るために使用される場合もあることが明らかとなった。

以上のことから、穿孔土器や赤彩土器は伊勢湾周辺地域全域における共通した認識の枠組みのもと、小地域内・小地域間において序列や階層差を示す儀器として使用されていたと結論付けることができる。

また一方で、穿孔土器の属性を抽出する際には、穿孔タイミングや穿孔方向を区分する明確な基準が必要であると考え、プロジェクトの経費の一部を使って穿孔実験を行った。その結果、各調査機関において実見した穿孔土器と同様の痕跡を再現することに成功し、穿孔土器の区分基準を明確化することができた。

表1 肉眼観察を行った土器

遺跡名	遺跡の所在地	資料保管機関	調査点数	調査内容
一本松遺跡	岐阜県大垣市	大垣市教育委員会	3	穿孔土器の実見・観察
東町田遺跡	岐阜県大垣市	大垣市教育委員会	1	穿孔土器の実見・観察
荒尾南遺跡	岐阜県大垣市	岐阜県文化財保護センター	41	穿孔土器の実見・観察
野口・北出遺跡	愛知県稲沢市	稲沢市教育委員会	6	穿孔土器、赤彩土器の実見・観察
朝日遺跡	愛知県清須市	愛知県埋蔵文化財調査センター	13	穿孔土器の実見・観察
大城遺跡	三重県津市	津市教育委員会	5	穿孔土器の実見・観察
倉谷遺跡	三重県津市	津市教育委員会	3	穿孔土器、赤彩土器の実見・観察
菟上遺跡	三重県四日市市	三重県埋蔵文化財センター	2	穿孔土器の実見・観察
山村遺跡	三重県四日市市	三重県埋蔵文化財センター	2	穿孔土器の実見・観察
小牧北遺跡	三重県四日市市	三重県埋蔵文化財センター	1	穿孔土器の実見・観察
下之庄東方遺跡	三重県嬉野町	三重県埋蔵文化財センター	2	穿孔土器の実見・観察
曾祢崎遺跡	三重県明和町	三重県埋蔵文化財センター	2	穿孔土器の実見・観察
コドノB遺跡	三重県明和町	三重県埋蔵文化財センター	3	穿孔土器の実見・観察
寺垣内遺跡	三重県明和町	明和町教育委員会	3	穿孔土器、赤彩土器の実見・観察

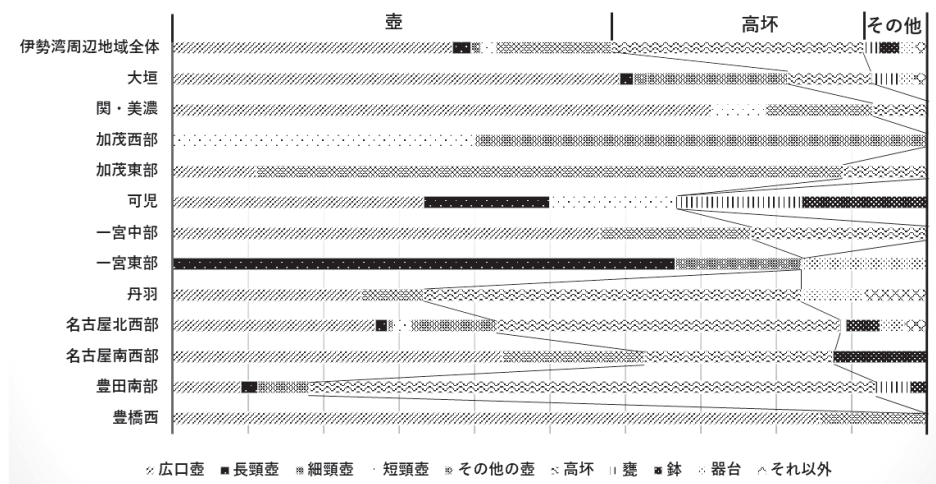


図1 赤彩土器の器種構成



図2 複数穿孔土器

（荒尾南遺跡出土、岐阜県文化財保護センター所蔵）



図3 焼成後引っ掻き穿孔を行った土器

（朝日遺跡出土、愛知県埋蔵文化財調査センター所蔵）

謝辞 今回の調査につきましては、以下の調査機関・担当者の方々に様々な便宜を図っていただくとともに、多くのご教示を賜りました。末筆ではありますが明記して感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

愛知県埋蔵文化財調査センター・稲沢市教育委員会・大垣市教育委員会・岐阜県文化財保護センター・津市埋蔵文化財センター・三重県埋蔵文化財センター・明和町教育委員会

磯貝龍志・加中雅章・熊崎 司・城ヶ谷和広・高田康成・田中俊輔・原田 幹・日野幸治・味噌井拓志・三宅知世・村木一弥

猿投窯出土須恵器の3Dデータベース構築

井上隼多 考古学分野・専門 博士後期課程2年

本稿では猿投山西南麓古窯跡群（以下猿投窯）出土須恵器の3Dデータベース構築を目的として実施したフィールド調査プロジェクトについて報告を行う¹⁾。猿投窯は愛知県中央北部を中心に分布する5世紀から11世紀にかけての窯跡遺跡群であり、大阪府南部に位置する陶邑窯と比肩する古代日本の一大窯業生産地である。須恵器をはじめとする猿投窯の窯業製品は全国的に流通していたことが出土資料によって確認されており、古代日本の窯業史を解明する上で重要な遺跡群として知られている²⁾。

猿投窯に関する研究は編年上の整理が主な論点とされてきた。窯跡遺跡の性質として、窯の操業開始から廃絶までに生産された製品のおおよその年代を特定することで、消費遺跡でも同じ型式の製品をもとに年代推定が可能になるというものがある。窯で焼成した製品は破損によって出荷を断念し、窯の周辺や内部に破棄されるものが少なくない。破棄された状況がそのまま残存することから、このような検討が可能になるのである。したがって窯跡遺跡はそれ自体が考古学上の年代基準として機能するのであり、数百年にわたって操業された窯跡遺跡群では良好な編年体系を構築することができる。上述の背景から、猿投窯の編年は「窯式期」と呼ばれる代表的な窯の操業期間をもとにした時期区分が採用され、これをもとに編年に関する議論が蓄積されてきた。窯式期は操業期間に焼かれた様々な製品のセット関係をもとに時期を設定する方式で定められており、時期区分であると同時に、窯業文化を反映する概念としての意義も有している。

本フィールド調査プロジェクトでは猿投窯で生産されていた窯業製品のうち、8世紀中頃から9世紀中頃（窯式期ではNN-32号窯式期・O-10号窯式期・K-14号窯式期）にかけて生産されていた須恵器を対象として3Dデータの取得作業を行った。スキャンを行った須恵器は名古屋大学考古学研究室によって発掘された資料であり、現在は愛知県陶磁美術館に保管されている。作業は2019年の7月から収蔵資料を適宜出納する方式で進め、51回に及ぶ訪問で須恵器500点の3Dデータ化を完了した。スキャンを行った須恵器は坏身・坏蓋・碗・盤の四器種であり、いずれも饗膳具として生産されたものである。この四器種は他器種と比べ生産量が多く、時期差による微細な外形の変化が抽出可能と考えられる。また、資料によっては明確に器種の分類を行うことが難しく、手工業製品に特有のあいまいさを検討する上で最適のサンプルと言える。

今後は作成した須恵器の3Dデータベースをもとに、AIによる機械学習を援用しつつ、資料の分類や年代順の変化を定量的に検証する研究を進める計画である。従来の考古資料の分析では、資料間に見受けられる微細な差異などについて客観的指標を提示して議論をすることが難しかった。須恵器に関して言えば、窯式期内の年代差や、一点一点の資料分析には限界があるとされている³⁾。こうした課題を受け、先学による研究成果と機械学習による結果の比較検討を行いつつ、定量的かつ第三者の検証可能な分析手法の確立を目指して研究を進めていく。

1) 本フィールド調査プロジェクトは「陶邑窯跡群出土須恵器の3Dデータベース構築」として採択されたものであるが、諸般の事情により調査対象を猿投窯に変更して実施した。

2) 愛知県史編さん委員会編、2015、『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系、愛知県：名古屋市。

3) 尾野善裕、2019、「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて—飛鳥・藤原地域を中心に—」『奈良文化財研究所・歴史土器研究会共催シンポジウム 飛鳥時代の土器編年再考』、奈良文化財研究所・歴史土器研究会：奈良。

日露戦争の疾病史的研究

——赤痢・腸チフス流行構造の解明と対策の実態把握を中心に

加藤真生 日本史学分野・専門 博士後期課程2年

本プロジェクトは、日露戦争における赤痢・腸チフスの流行実態と日清戦争後に赤痢・腸チフス対策がいかなる形で構築され、実践されたのかを検討するものである。これまで、筆者は戦死者の約9割が病死者であった日清戦争のコレラと赤痢を事例に、その流行の内実を検討し、日本陸軍は海と陸で質の異なる疾病経験をしたことを明らかにしてきた。この成果から筆者は、日清戦争での疾病経験を通じて、海外の陸と海への環境適応が日本の対外進出上不可欠となったことが明らかになったと考えている。日露戦争ではコレラや赤痢といった感染症は、日清戦争に比べて抑制されたと知られているため、日清・日露戦間期における医学研究により、大陸進出上の環境的な問題をある程度克服できたと考えられる。この点について先行研究では、具体的な分析がされないまま日本独自の研究と実践の結果という一国史的な評価を下している。これに対し筆者は、同時代のヨーロッパ各国軍隊においても感染症対策が進められていたことに注目し、ヨーロッパとの交流をふまえて日露戦争を検討すべきではないかと考えている。以上の問題意識をふまえ、本稿では調査をもとに、①「陸の疾病」であった赤痢・腸チフスの流行構造について、②ヨーロッパにおける軍事医学ネットワークの形成と赤痢・腸チフス対策上の北清事変の意義について簡単にまとめた。

まず、戦時の赤痢・腸チフスの流行構造について。中国東北地方は乾燥地帯であり現在でも貧水地帯として知られ、朝鮮半島は平地の少ない山間地域である。このように元来水資源の獲得が困難な地域では、水質の良い水（水質検査を経て良好とされた水）を、軍隊の需要に堪えうる量で安定的に供給し続けるのは困難であった。この結果、戦時下では人為的な水不足状態が発生し、兵士たちは渇きを満たすために汚染水を摂取したため、赤痢・腸チフス発症者が生じるに至った。さらに、軍隊の尿尿による都市村落の汚染に伴うハエ大繁殖により、赤痢・腸チフスが流行するに至った。ハエ自体は朝鮮半島や中国東北部に分布していたが、日本軍による尿尿汚染の結果ハエが繁殖しやすい環境が形成され、そこで大量に生じたハエが赤痢患者の糞便に接触し、菌が伝播したのである。つまり、戦時の感染症問題は朝鮮半島に大量に人口をかかえた日本軍が流入したことによる環境変動に伴って生じた現象であった。

次に、ヨーロッパにおける軍事医学ネットワークの形成と赤痢・腸チフス対策上の北清事変の意義について。19世紀のヨーロッパ各国軍隊では、戦・平時ともに感染症による兵士の死亡率の上昇が問題となっていた。こうした中で、19世紀末には万国医事会議（International Medical Congress）といった国際的な医学、衛生会議に軍事医学部会が設けられ、ヨーロッパ各国軍医が医学的な議論を深め、各国の経験やそれにもとづく医学的な知見が共有された。なお、日本も1887年から参加している。赤痢・腸チフスに関しては、1900年の第13回万国医事会議パリ大会において集中的に議論された。この年は北清事変も生じた年であり、1900年時点でのヨーロッパ各国の赤痢・腸チフス対策の成果が持ち込まれたと考えられる。実際、日本陸軍軍医部は各国の衛生対策について調査を行っており、その成果は「北清各国軍隊衛生状況視察復命書」（陸上自衛隊衛生学校医学情報史料室所蔵）としてまとめられた。北清事変は各国の研究成果を実見し受容することができた場であった（日向玲理「日清・日露戦争期における日本陸軍の「仁愛主義」——衛生事業をめぐる受容と実践」『駒沢史学』87、2016年も参照）。

なお、日露戦争では様々な衛生対策が取られたが、どの実践が効果的でそれがどのように生まれたのか、という情報交流と実践の関係性について、また国際会議の実態と日本との関係性などについては、筆者の力不足のため検討中であり、今後の課題としたい。

薩摩藩と琉球王国が支配する「琉球国」 ——近世奄美諸島の島役人の実態分析を通じて

KOROTINSKIS Igors 日本史学分野・専門 博士後期課程2年

研究背景 近世琉球史研究では、1609年の島津氏琉球侵略以降の奄美諸島を「琉球国」の一部としてみなさない。奄美諸島は現在鹿児島県大島郡であり、鹿児島県の一番南にある。史料上では、その奄美諸島の在役人（以下：島役人）などを考察すると、その役人は明らかに琉球人の扱いを受けている。具体的に、島役人は日本人の名前を名乗ることや日本風の服装を着用することが規則で厳しく禁じられていた。先行研究はこれを「隠蔽政策」や差別問題として捉えたが、それは地方の風俗を保存するためではないかと考えられる。その風俗の一環として土地制度も琉球国時代の形で保存されて、明治期まで存続した。奄美諸島は薩摩藩の直轄領（蔵入）となりながらも、琉球国の様相を保った。とはいえ、琉球史研究は2000年以降著しく進展した今でも、奄美諸島を見逃す傾向をもち、薩琉・日琉関係史からまったく除外されている。その問題に加えて、島役人は百姓身分になったという捉え方があるのだが、経済上・身分上では藩に百姓と島役人の身分的な区別がみられる点について、研究は触れていない。

研究目的 近世島津氏支配下の奄美の島役人に関する史料を調査・考察していくことで、以下のことを目指す。まずは、(1)島役人が所有した土地と特権を扱う未刊行の史料を集める。島役人はどのような形で土地を所有して、島役人の土地（オエカ地、中世より残った島役人所有形態）と藩支配を照らす史料を見つけ出す。また、可能な限り、島役人と百姓との身分的な区別を考察できる史料を探す（服装、移動権、その他の特権）。(2)島役人は薩摩藩の支配下にありながら、広義の「琉球国」の文化・風俗に結ばれていた跡が見られる。前近代の文化と風俗はある者の生活を定めることと見て、薩摩藩内の島役人が「琉球国」・「琉球人」に本格的に属していたことについてデータを集める。

調査方法 2019年10月10日から同23日まで現地に赴き、鹿児島市・沖縄県・那覇市の文書館・博物館などを訪問した。また、この調査の重点となる沖永良部島知名町に1週間程度滞在して、地方の史料と故弓削政己先生が知名町図書館へ寄贈した史料を調査した。調査する史料は多様であるが、調査の中心は近世奄美諸島の島役人であった。特に藩関係、海運と土地所有に関する史料調査がメインであった。

調査結果 史料調査は次の成果をもたらした。まずは、沖永良部島で未刊行の個人所蔵の史料・先祖家譜を閲覧できた。個人所蔵史料は近世期後期の島役人の社会・経済への貢献、土地所有と名字獲得の経緯を記す史料である。その史料は未刊行のものであるため、島役人に関する理解は深められた。さらに、島役人の海運統制と鹿児島から派遣される藩側役人との関係文書もいくつか発見した。この史料を以て、奄美諸島・日琉交通・東アジアの漂流民送還のデータの空白が埋められる。それから、島の宗教者である「ノロ」の文書も閲覧でき、近世ノロの土地所有の史料もそのなかに含まれており、期待を上回った。ノロは薩摩藩の弾圧を受けたが、島役人と同じく土地を所有していた跡が史料に見られる。ノロは土地を所有しただけではなく、島役人との血縁的な関係を有したことから、島役人・宗教者・土地の三角関係の研究は前進した。また、未刊行の島役人の家譜や個人所蔵史料を複写したので、今後刊行される史料集を増補することもできるだろう。

中国人日本語学習者による間接発話行為の理解

李 璐 日本語教育学分野・専門 博士後期課程3年

研究内容 本研究では、Taguchi (2008) の語用論聴解テストを修正・改善し、正確さと速さという2つの指標から中国人日本語学習者の間接発話理解を測定した。また、学習者の聴解力、語彙アクセスの効率性(速さと正確さ)、自閉傾向を実測し、これらが間接発話理解の正確さおよび速さに及ぼす影響を検討した。

調査対象 中国の大学で日本語を主専攻とする2年、3年、4年生の合計65名である。

調査概要 E-prime 3.0で実験①と②のプログラムを作った。①間接発話理解実験。間接発話理解実験は、練習2項目、慣習・非慣習の間接意見の理解課題それぞれ12項目、間接断り12項目、フィラー12項目からなる。50項目のそれぞれは、視覚提示の宣言文、音声提示の男女2者間の会話から構成した。間接発話文が2者間会話の最後のターンとして組み込まれた。2者間会話の音声が消えた時点から学習者がYES/NOのボタンを押すまでの時間と、判断の正誤をコンピュータで記録した。②有生性判断実験。有生名詞43語、無生名詞43語からなる音声提示の実験である。有生・無生名詞両グループの語彙難易度、使用頻度、モウラ数を統制した。各語の音声提示の開始から学習者が判断をするまでの時間と正誤判断の結果を記録した。③聴解テスト。早川・魏・初・玉岡 (2016) が開発した聴解テストを使った。④中国語版自閉症スペクトラム指数。李・玉岡 (2019) が開発したAQ25 (Autism-Spectrum Quotient 25) を使った。

分析と結果 R Studio 上で lme4 パッケージの lmer コマンドで起動する線形混合効果 (linear mixed effects) モデルを使って分析した。①理解速さの分析と結果。反応時間の分析は正しく判断された1,959項目のみを使用した。Box-Cox power transformation のラムダ (λ , lambda) を指標として最適なデータ変換の方法を判定し、間接発話理解および語彙アクセスの反応時間は対数変換が最適であったため、自然対数に変換してから分析した。分析では、被験者 (subject) と刺激項目 (stim) をランダム効果とし、試行順序 (trial)、3種類の間接発話 (condition)、自然対数に変換した語彙アクセスの速さ (loglexrt)、語彙アクセスの正答率 (lexacc)、聴解テストの得点 (listening)、自閉症スペクトラムの得点 (autistic) を固定効果とした。赤池情報量 (AIC) でモデルを比較したが、lmer (log(pragrt)~(1|subject)+(0+trial|subject)+(1|stim)+(0+trial|stim)+trial+loglexrt, data) が最適であった。さらに、このモデルの誤差の分散で「誤差平均±標準偏差2.5」を境界値として外れた値を除外した (41個が除外された)。被験者ごとの試行順序が間接発話理解の速度に対して有意に影響した [$t(52.86)=-7.05, p<.001$]。また、語彙アクセスの速さも有意であった [$t(63.26)=6.91, p<.001$]。語彙アクセスが速ければ速いほど間接発話の理解も速くなった。②理解正確さの分析と結果。間接発話理解の正確さは、誤答が0、正答を1として、LME (lme4 パッケージの glmer) の二項 (binomial) で分析した。被験者と刺激項目をランダム効果とし、試行順序、間接発話の種類、自然対数に変換した語彙アクセスの速さ、語彙アクセスの正答率、聴解テストの得点、自閉症スペクトラムの得点を固定効果として、正誤を予測するモデルを模索した。赤池情報量で比較した結果、glmer (pragacc~(1|subject)+(0+trial|subject)+(1+trial|stim)+trial+lexacc+listening, data, family=binomial) が最適となった。被験者ごとの試行順序が間接発話理解の正確さを有意に予測した [$z=4.37, p<.001$]。語彙アクセスの正答率も有意であった [$z=4.03, p<.001$]。語彙アクセスの正答率が高ければ高いほど、間接発話理解の正確さも高くなった。さらに、聴解力も有意であった [$z=2.96, p<.01$]。被験者の聴解力が間接発話理解の正答率を促進した。

参考文献

- Taguchi, N. (2008) Pragmatic comprehension in Japanese as a foreign language. *The Modern Language Journal*, 92(4), 558-576.
 早川杏子・魏志珍・初相娟・玉岡賀津雄 (2016) 「中国語および韓国語を母語とする日本語学習者のデータを基にした日本語聴解能力テストの開発と評価」『関西学院大学日本語教育センター紀要』5, 31-45.
 李璐・玉岡賀津雄 (2019) 「中国語版『自閉症スペクトラム指数 (AQ)』の開発」『音声言語医学』60(4), 314-324.

中エジプトの動物墓地からみる聖獣信仰の様相について

清水麻里奈 西洋史学分野・専門 博士前期課程2年

調査の目的 本プロジェクトでは、古代エジプト宗教である聖獣信仰について、中エジプトの動物墓地に焦点を当てて考察する。

前7世紀から後4世紀の約1千年の間、何千万体という夥しい数の動物ミイラがエジプト全土に散在する動物墓地へと埋納された。聖獣信仰がこの期に隆盛をみせたことについて、王権主導の公的祭儀とみなされてきた学史がある (Kessler 1989)。しかし、エジプト全土で行われていた動物の飼育とミイラ化、さらには祈願者の巡礼など、数多くの聖獣信仰を通じて行われた活動を考えると、公の側面のみならず、私の側面で再検討する必要が生じる。つまり、民衆という視座から聖獣信仰の様相を考えなければならないのである。

そこで、本プロジェクトでは「地方」である中エジプトの動物墓地における民衆による信仰の様相について、とりわけ墓地から出土した考古資料の価値に差があることに着目し、聖獣崇拝に携わった経済活動を考究する。

調査の概要 調査期間：2019年12月16日～2020年1月31日（日本発：2019年12月15日、日本着：2020年2月1日）

調査Ⅰ：アコリス（上エジプト第14ノモス、現：テヘナ・エル・ジェベル）、アコリス調査発掘隊に参加し、神殿内につくられた動物ミイラ奉納所の調査を行った。調査Ⅱ：イピオタフェイオン（上エジプト第16ノモス、現：トゥナ・エル・ジェベル）、エジプト考古局の Dr. ムハンマド・アフバッラーと共に探訪。「トキとヒヒの動物墓地」と、通常は入場不可である「動物ミイラづくりの場」に訪れ、信仰に関連する遺構・遺物の調査を行った。

調査結果 調査Ⅰでは、動物ミイラ奉納所は、動物墓地ではなくワニを奉納するための奉納所である蓋然性が高いことを考究した。また、この神殿施設に動物を納める例は管見によれば唯一の史料であり稀有な例であるため、今後さらなる調査が期待される。調査Ⅱでは、動物ミイラから読み取ることのできる生産活動、とりわけミイラ化の差異・棺（石棺、木棺、土器棺）・副葬品の有無という点から、同一の機能を持つ遺物において材質が異なるのみならず多様な形態を有することを確認した。また、この背景には、聖獣信仰の興隆のために信仰に関連する一連の考古遺物の生産・消費活動が向上したとする可能性を見出した。

考察と課題 今回の調査では、中エジプトの動物墓地を探訪し、信仰に関連する考古遺物にはその価値に差があることを解いた。聖獣信仰の興隆期において、これらの遺物や物品の生産・流通と巡礼者群の蟄集で消費活動が活発化したことを考慮するならば、信仰に関連する一連の考古遺物の生産活動が向上したことが推測される。たとえば、棺について言及するならば、土器棺の場合にはマールクレイか在地産かという粘土、木棺材ではその樹種、石棺材でもその石材産地を吟味しなければならないが、在地産についてはその生産体制が組まれていたこと、交易を前提とする原材料や完成品については、交易可能な組織体に連なっていたことが推測される。

なお、本プロジェクトは、修士論文執筆のために行われる予定であったが、エジプト警察庁からの発掘許可が降りなかったという母体となる発掘調査団の調査遅延を受けて、博士論文執筆のための調査となった。また、予定していた全ての遺跡への探訪は叶わなかった。しかし、本プロジェクトの調査結果は今後取り組む申請者の学位論文の根幹をなす貴重な調査結果となりうるだろう。

参考文献

Kessler, D. (1989) *Die Heiligen Tiere und Der König, I.*, Wiesbaden: Harrassowitz.

ペルシア語を母語とする日本語学習者における 日本語のテンス・アスペクト習得の横断的研究

SHAHBAZI Yaser 日本語教育学分野・専門 博士後期課程3年

本研究はペルシア語を母語とする日本語学習者における日本語のテンス・アスペクト（時制・時相）の習得について、習得段階ごとに横断的に調査し、誤用の傾向と母語であるペルシア語の影響について明らかにするものである。日本語のテンス・アスペクトの研究は、庵（2001）など膨大な研究業績があり、非母語話者の習得研究も許（2005）など多くの研究成果がある。本調査は Khomeijani（1990）などで指摘されているペルシア語のアスペクト体系を参考にして、両言語のアスペクト体系の違いがペルシア語話者の日本語習得に与える影響を明らかにするものである。

本研究では特に「テイル」を中心に分析し、「テイル」の意味を「進行中」（犬が走っている）、「結果状態」（財布が落ちている）、「繰り返す」（毎朝ジョギングをしている）、「完了」（駅に着いた時、電車は出発していた）、「単なる状態」（彼女は母に似ている）の5つに分類するとともに、前節する動詞を語彙的アスペクトの違いによって分類した。これにより、①「テイル」の意味、②前節する動詞の語彙的アスペクト、③ペルシア語とのずれ、④学習者の習得レベルの4つの要因を分析の観点として、統計的に分析した。

被験者はイランのテヘラン大学で日本語を専攻している学生83名（1年生22名、2年生27名、3年生19名、4年生15名の4グループ）で、日本語の学習期間の別に実施した。本研究では(1)のような四者選択テストを実施して、選択率を調査した。テストの問題は、「テイル」の習得上テンスの影響を調査するために、過去形の「テイタ」と非過去形の「テイル」に違う語彙的アスペクト的性質を持つ動詞を前節した文章にした。さらに、副詞や文中の文脈などを使用して、以上提示した「テイル」の5つの意味が明確になるような、合計68問を作成した。問題数が多かったため、テストの問題を2つに分けて、各グループに2回、合わせて8回実施した。両言語のアスペクト認識をさらに正確に把握できるように、被験者に選択した日本語の動詞のペルシア語の動詞の活用も記入してもらった。

(1) 最近テレビの視聴率が（落ちる、落ちた、落ちている、落ちていた）。

これにより、学習者の文法的判断を見ると同時に、母語転移の可能性について明らかにすることができる。従来ペルシア語話者におけるこのように詳細な日本語のテンス・アスペクトの習得研究は行われておらず、本研究は日本語のテンス・アスペクトの習得研究にとって重要な位置を占めることができると考えられる。また、(1)のテストは日本語母語話者（33名）にも実施し、母語話者のテンス・アスペクトの認知システムとペルシア語話者の認知システムを比較することを可能とした。（現在分析中）

その結果、「テイル」の意味と動詞の語彙的アスペクトによって誤用のパターンや傾向が多様であることが分かった。例えば、最も習得しやすいのは、「進行中」の「テイル」に「継続動詞」が前接するところで、「完了」の「テイタ」の場合、学習者は動詞自体のアスペクト的な意味を分かっているにもかかわらず、「テイタ」と「タ」のアスペクト的な意味が区別しにくいこと、異なる習得レベルでも誤用を犯しやすいことを明らかにした。また、「変化動詞」や「状態動詞」の場合に学習者と母語話者の選択率の差が大きいことを明らかにした。

参考文献

- 庵功雄（2001）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4号、pp. 75-94.
許夏珮（1997）「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95号、pp. 37-48.
Khomeijani Farahani, Ali Akbar (1990) *A syntactic and semantic study of the tense and aspect system of modern Persian*. PhD thesis, University of Leeds.

出土した瓦からみた南詔国中後期の国家構造

晏 梓郁 東洋史学分野・専門 博士前期課程2年

南詔国は8世紀から10世紀にわたって今日の中国西南部（主に雲南省）とミャンマー北部などの土地に存在した謎多き古代国家であった（図1）。この南詔国という国の歴史記録はわずかに握りしかない。現代に伝わる文献史料以外に、文字のある実物史料は稀有である。その実物史料のなかで碑文の「徳化碑」は最も重要で、かつ最も多くの情報を伝えるものである。次は「倉貯碑」である。この碑文は2001年に発見され、南詔国の倉庫管理および早期の城鎮名などに言及している。残念ながら、この二つの石碑のほかにはいまだに新たな碑文が出土しておらず、実物で南詔国の歴史を研究するには「有字瓦」に頼るしかない。

南詔国の遺跡で出土した有字瓦は漢字または漢字のようなマークを付けられた南詔国時代の瓦を指す。このような瓦が各南詔国の遺跡に広く分布しており、大量に存在する（図2）。情報量が少ないとはいえ、現に使える実物史料のなかで珍しく解読可能な史料である。2019年に私は雲南省考古チームから大理州付近の南詔国遺跡の発掘が再開されたことを知り、9月に現地で、実物の有字瓦およびその拓片を考古現場で確認した。調査地は南詔国の国都であった現在の雲南省大理白族自治州の大理市、巍山県および祥雲県三ヶ所であった。まずは大理市付近の大和城遺跡から出土した瓦のうち、2016年大和城仮発掘調査によって出土した瓦〔TS030W007④：28〕の文字を解読すると「皇」もしくは「白王」2つの漢字に似ているが、筆者は「白王」の可能性が高いと考える。印された文字をよく見れば、何らかの模版でできた陽刻であり、「白」と「王」に類する文字は明らかに同じ模版にあるが、二文字が「皇」に見えるのはおそらく当時の職人が漢字に精通していなかったため、印した文字が稚拙であったからであろう。南詔国・大理国の君主を白王と称する習慣は確かにあり、また大和城と近いところに「白王冢」という地名も現存する。いずれにせよ、「皇」も「白王」も君主を指す言葉であり、この瓦の発注元は君主である可能性が高い（ただし、唐側の史書によると南詔国君主の称号は驃信である¹⁾）。また、瓦には明らかに「官」と「買」の2つの文字があり、公的なところからの注文で作られた瓦であろう。ちなみに、田氏は「官」は官瓦の略語で、「買」は職人の名前か記号だと考えている（田2011）。このような瓦は大和城付近での出土はかなり多く、当時この地域の瓦の製造は南詔国の政権から直接の指示を受けて行われたと考えられる。いままで南詔国時代の君主を「白王」と呼ぶのはあくまで白族内部の習慣であり、直接の文字史料がなかったため、この瓦の発見は白族の起源および南詔国王との繋がりにとって意味がある。

また同じ大和城から出土した瓦〔TS030W007④：11〕から「官李買」3文字がはっきり判読できるが、「買」の下が欠けているため、これだけでは李姓の人が買った瓦か、それとも李買□という人が注文した瓦か判断し難い。しかし興味深いことに「南詔徳化碑」の碑陰にも李買□という人物の名前があった。現存の碑文では官職はすでに判読し難い状態になっているが、この人物は当時の南詔国の清平官であることは間違いないであろう²⁾。徳化碑の樹立は天宝戦争以後であり、その時にちょうど閣羅鳳が大和城を都にした。そのため、李買□はこの瓦の注文主である可能性が高いと考えられる。したがって、これらの瓦に記された文字はおそらくは発注先と注文主の身分を指す。また一部の瓦に「奴」、「田」および紀年（いまだに年号を示す文字は見つからず）があるため、某年某処または某氏に属す某職人が作った情報が記録されていたとも考えられる。したがって、「白王」という文字のある瓦なら南詔国の君主が注文したものかその君主に属した者が作った瓦の可能性が高い。

最後に、祥雲県の白崖遺跡で出土した瓦〔2017MJIG10①：86〕から「大和酋」の3文字を判別できる。

1) 『新唐書』巻二百二十二中「子尋閣勸立、或謂夢湊、自稱驃信、夷語君也」。

2) 『金石萃編』巻一百六十収録の『徳化碑』碑陰の内容は『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編』第35冊を参照。

大和または太和は当時の南詔国の都である大和城またはその地域を指す可能性が高く、大和酋は大和の君主を指すことは明白であろう³⁾。ただ、白崖城で発見されたこの称号は文献史料には存在せず、おそらくこれも当時実際に使われた君主の称号の一つであろう。その新たな称号は果たして南詔国の君主を指すか否かまだ検討する必要があるが、いままで史書で使われていない称号が存在すること自体は今後の研究にとっても有意義であろう。

まとめてみると、今回の調査で南詔国時代の国王および高官と繋がる瓦が確定された一方、瓦に記載された一部の情報は史書などの文献資料にないものの、当地の少数民族の口頭伝承には存在する。口頭伝承はこれからの研究に啓発的な意味があると考えている。



図1 南詔国およびその周辺勢力図

(出所：ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E8%A9%94> 2020/3/16/ 15:30)

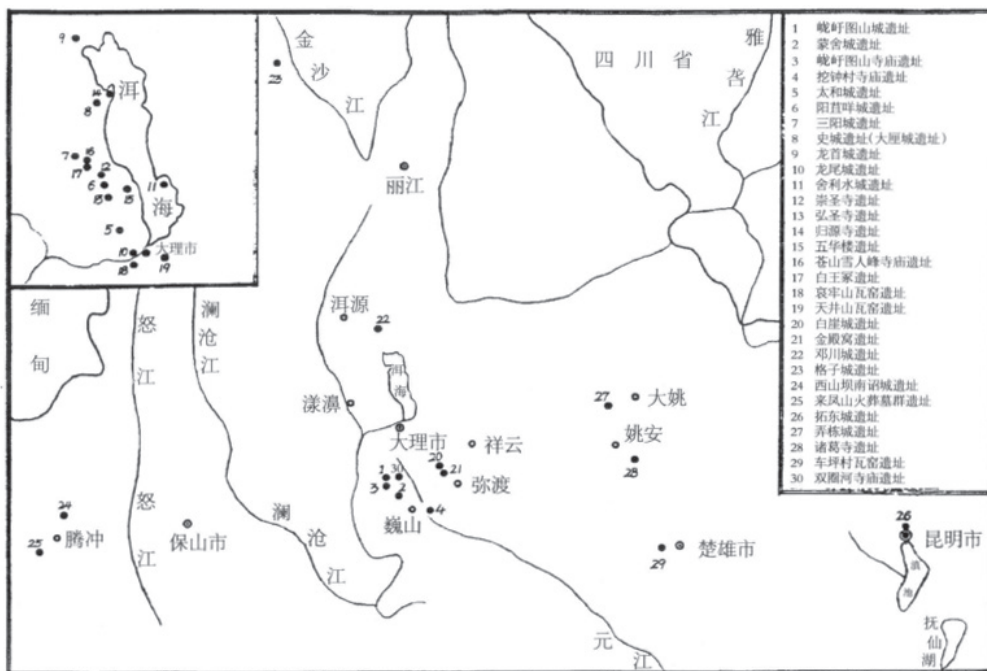


図2 「南詔大理国瓦文」分布図 (出所：田 2011、38頁)

参考文献

田懐清 (2011)『南詔大理国瓦文』雲南人民出版社

3) 『新唐書』卷二百二十二上「開元末、皮羅閣逐河蛮、取大和城、又襲大釐城守之、因城龍口、夷語山坡陀為和、故謂大和、以処閣羅鳳」。

2. 教育研究推進室主催の行事（FD・ワークショップ・その他）（2019年度）

年 月 日	発 表 者	題目・概要等
2019年4月18日	奥村華子・齋藤都・加藤真生	日本学術振興会特別研究員応募説明会
2019年12月2日		日本学術振興会特別研究員候補者模擬面接
2020年1月29日	奥村華子・齋藤都・加藤真生	日本学術振興会特別研究員応募説明会第2回目
2020年3月5日	林順・井上隼多・加藤真生・KOROTINSKIS Igors・李璐・SHAHBAZI Yaser・清水麻里奈	フィールド調査プロジェクト報告会 (第5回教育研究推進室主催ワークショップ)

Ⅱ 人文学研究科の教育・研究活動

1. 教員の著書（単著）一覧（2019年度）

著 者	書 籍 名	出 版 社	発行年月
和田光弘	植民地から建国へ ——19世紀初頭まで シリーズアメリカ合衆国史 1	岩波新書	2019年 4 月
KATO Yasue	L'Évolution de l'univers floral ches Proust: De <i>La Bible d'Aneubs</i> à <i>La Recherche du temps perdu</i>	Honré Champion (Paris)	2019年 5 月
河西秀哉	平成の天皇と戦後日本	人文書院	2019年 6 月
釘貫 亨	動詞派生と転成から見た古代日本語	和泉書院	2019年 8 月
サヴェリエフ・イゴリ	自治領時代カナダの政治と日本人移民	御茶の水書房	2019年 9 月
大井田晴彦（校注）	伊勢物語 現代語訳・索引付	三弥井書店	2019年10月
MA Ran	Independent Filmmaking Across Borders in Contemporary Asia	Amsterdam Univ. Press	2019年11月
周藤芳幸（訳）	パウサニアス著 ギリシア案内記 2 ラコニア／メッセニア	京都大学学術出版会	2020年 1 月
WADA Toshihiro	Navya-Nayāya Philospphy of Language	D. K. Printworld (New Delhi)	2020年 1 月
佐野誠子	怪を志す——六朝志怪の誕生と展開	名古屋大学出版会	2020年 2 月

2. 教員の自著紹介

河西秀哉『平成の天皇と戦後日本』人文書院

NHKが5年ごとに行っている「日本人の意識」調査は、同じ質問・方法で世論調査を行っており、そのなかのひとつに、「あなたは天皇に対して、現在、どのような感じをもっていますか」という質問がある。回答リストには「尊敬の念をもっている」「好感をもっている」「特に何とも感じていない」「反感をもっている」などの項目があり、このなかから16歳以上5400人の対象者が回答を選択する。直近の調査は2018年6月から7月にかけて行われた。平成30年という、この元号が終わりを迎えつつあった時期である。

その結果は、「尊敬」が41%、「好感」が36%、「何とも感じず」が22%、「反感」が0%で、8割近い人々が天皇に対して好印象を持っていた。1973年に始まった調査以来、「尊敬」は最も高く、逆に「何とも感じず」は最も低い数値である。昭和の時代、「何とも感じず」は常に5割近い数値を示しており、一方で「尊敬」は徐々に減少していた。それが平成に入った時に「好感」が上昇、2003年からは「尊敬」も次第に上がりはじめ、現在に至った。これは、いわゆる「平成流」と呼ばれる、象徴天皇制のあり方に大きく関係しているのではないかと考えた。こうした疑問から、そのあゆみを歴史的に検討してみたのが本書である。

本書の特徴は、2つあると考えている。第一に、昭和後半から平成の歴史を検討したことである。現代史といえども、現在に近い時期までを研究対象とすることはそれほど多くはない。それは、研究者自身がその時期を生きてきたこともあり、自らの記憶が客観性を阻害してしまう可能性があるためだろう。しかし、本書ではあえてそれを恐れずに挑戦してみた。そうすると、私たちは意外に近年の出来事を忘れていることに気がついた。象徴天皇制が形成される過程は、多くの先行研究によって解明されており、私自身もそれによって学んできた。ところが、「平成流」をめぐる様々な出来事があったにもかかわらず、そのことについては未だ研究対象になっていなかったこともあり、その意味を問うことも、場合によってはその出来事存在すら忘却されて現在が語られているケースもあった。たとえば、平成の初期、美智子皇后へのバッシングが相次いだ。いわゆる「平成流」への反発から、皇后が批判の対象になったのである。ところが、現在の「尊敬」が高い状況からではそれが想像できない。2016年の退位をめぐる政府の有識者会議で「平成流」を批判した人々が突如現れたように見えたが、そこには美智子皇后バッシングの経験が根底にあった。

第二に、マスメディアでの報道と天皇・皇后の言説の検討を両方重視したことである。1959年の明仁皇太子と美智子妃の結婚は、その時期に出版ラッシュであった女性週刊誌を含め、新聞・雑誌、そしてテレビなどのマスメディアによって大きく取りあげられ、いわゆるミッチー・ブームが起こった。こうした史資料を扱うこと自体、従来の歴史学ではあまりなかったかもしれない。とはいえ、国立国会図書館や大宅壮一文庫に通い、週刊誌などのマスメディアから皇室関係の記事を探して見てみると、記事内容の真偽はともかく、社会の求める雰囲気のようなものが見えてきた。そこには、理想的な夫婦像として彼らを求める人々の意識があった。とはいえ、それが長続きしなかったこともわかってきた。熱狂的な報道が収まった後、皇太子と皇太子妃は「象徴」をめぐる様々な模索を繰り返していく。そして、大きくは報道されなくはなるが、記者会見などの場でその模索の意味に関する発言を積極的に繰り返した。彼らの言説を検討していくと、後に「平成流」と呼ばれる彼らの行動の原点が見えてくる。さらに平成のマスメディアにおける報道を追っていくと、彼らの行動が平成の中盤から後半になって評価されていく様子もわかった。社会のあり方の変化が、彼らの行動や言説への見方をも変化させたのである。マスメディアでの報道と天皇・皇后の言説は関連しながら、「平成流」の象徴天皇制のあり方を構築していった。本書ではその過程を描き出した。

とはいえ、今読み返すと、本書の記述はまだまだ素描にすぎないようにも感じる。今後はより丁寧に史資料を検討することで、現在の象徴天皇制に至る歴史的過程を明らかにしたい。

佐野誠子『怪を志す——六朝志怪の誕生と展開』名古屋大学出版会

中国の魏晉南朝（六朝）時代、志怪と呼ばれる書物が書かれるようになった。本書の書名は、この志怪の語を訓読して『怪を志す』とした。「志」は「誌」字に通じ、記録を意味する。志怪とは、もともとは怪異の記録であった。本書はその六朝時代における志怪がどのように誕生し、また、仏教と邂逅したことで、どのような展開を持ったのかということを論じたものである。

本書は二部構成となっており、第Ⅰ部は、歴史記録として書かれた志怪という着目から、歴史書と志怪の関係について論じた。

第一章では、まず、六朝時代までの歴史書の編纂の状況をまとめ、書く人も種類も増加した背景をたどった。中でも六朝時代には雑伝と呼ばれるテーマ別の人物伝記集が多数書かれた。志怪も書籍目録である『隋書』経籍志では、史部雑伝類に分類されていた。志怪と他の雑伝書とを比較することで、志怪は、怪異をテーマとした人物伝記集と位置づけられることを明らかにした。さらに志怪の性格を明確にするため、正史にある災異の記録である五行志との比較を行い、国家にまつわる災異しか記録されなかった五行志にたいし、人物伝でもある志怪は、ある人物の怪異の遭遇の記録であり、これまでは記録に値すると考えられていないものが記録されたのだと論じた。章の最後では、五行志や志怪の妖異の情報はどのようにして得られたのかについて考察し、口頭伝達と書物からの引用との混合であることを指摘した。

第二章では、五行志と関わりが一定程度ある志怪以前の書と志怪を取り上げて、志怪的な怪異が、懐疑を持って見られていたのが、干宝『搜神記』では、五行志の災異と結びつけられることで、記録としての正当性を獲得し、その後は、ありふれた怪異の一要素となっていくさまを記述した。

第三章では、これまでの歴史書にはあまり記録されてこなかった、志怪ならではの怪異の話題として、廟神と幽鬼をとりあげた。志怪は、王朝の歴史という桎梏を離れ、生活空間に存在する、誰にでも起こりうる怪異を積極的に記録した。

第Ⅱ部においては、第Ⅰ部では触れることのできなかった志怪と宗教、特に仏教との関係について論じた。仏教は、インドで誕生し、中国に本格的に伝わったのは後漢時代末期、魏晉南北朝時代から本格的に広まった。つまり、志怪の誕生期とほぼ同じ頃のことである。仏教自体は、志怪の誕生には直接影響を及ぼしていない。しかし、特に南朝宋以降、仏教は志怪の内容に大きな影響を与えるものになり、一般の志怪の中に仏教の話題が出てくるのみならず、もっぱら仏教の題材のみを扱う「仏教志怪」も編まれた。

第四章では、仏教志怪誕生の背景を記述するために、志怪における僧侶の描かれ方の変遷を記述した。はじめは、非仏教徒が不可思議な異人としての僧侶を記録していたが、その後、仏教徒達は自らも積極的に不思議な能力を示す僧侶のことをするようになっていった。

第五章では、仏教志怪である『宣驗記』『冥祥記』『観世音応驗記』の違いについて論じ、特に応驗譚のみに特化した『観世音応驗記』について、前両書とのテキストの関係、また、それ以外の部分において、文献・口頭による応驗の情報を西方・北朝由来のものまで集大成した点が、他の志怪と異なることを明らかにした。

第六章では、仏教志怪の中でも特に盛んに説かれた冥界遊行の素材を扱った。仏教徒は、従来からあった中国での冥界訪問譚に、仏教の審判の要素を取り入れた。そこには、仏教とは関らない六朝志怪には従来存在しなかった意図的な変化が見て取れることを指摘した。

終章は「中国「小説」史への吸収」と題し、簡略ながらも志怪・仏教志怪の唐代における変質、唐代伝奇への変化、そして、本来は史として書かれていた志怪が、はじめから本質では史を志向していなかった唐代伝奇と同じく、宋代以降は「小きき説」として歴史書の片隅からも完全に追い出されたことを記述した。

本書は、筆者の六朝志怪に関する研究の総まとめであり、日本語著作としては、初の六朝志怪に関する専著でもある。

Ⅲ 各種データ

1. 教育の現況

1-1 教育プログラムの構成

資料1 人文学研究科の学位プログラム・コースと分野・専門（2017年度以降）

学位プログラム	コース	分野・専門
言語文化系	文芸言語学	言語学、日本語学、日本文学、英語学、英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、中国語中国文学、日本語教育学、英語教育学、応用日本語学
	哲学倫理学	哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史文化系	歴史学・人類学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
	総合文化学	映像学、日本文化学、文化動態学、ジェンダー学
英語高度専門職業人	英語高度専門職業人	
多文化共生系	国際・地域共生促進	

資料2 文学部のコースと分野・専門（2017年度以降）

コース	分野・専門
文芸言語学	言語学、日本語学、日本文学、英語学、英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、中国語中国文学
哲学倫理学	哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史学・人類学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
環境行動学	社会学、心理学、地理学
C30国際	アジアの中の日本文化

1-2 教員数・学生数

資料3 人文学研究科教員の年齢別、男女別構成（2019年度、5月1日現在）

	男性	女性	計
20歳代	0	0	0
30～34歳代	0	2	2
35～39歳代	4	1	5
40～44歳代	9	6	15
45～49歳代	10	6	16
50～54歳代	14	13	27
55～59歳代	16	4	20
60～65歳代	20	2	22
計	73	34	107

出典：文系総務課記録

資料4 人文学研究科の学生定員と現員（入学者数推移）（各年度、5月1日現在）

	前期1年		前期2年		計		後期1年		後期2年		後期3年		計	
	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数
2017年度	104	108	—	—	104	108	61	53	—	—	—	—	61	53
2018年度	104	113	104	105	208	218	61	49	61	53	—	—	122	102
2019年度	104	115	104	123	208	238	61	39	61	50	61	51	183	140

出典：文系教務課記録

資料5 文学部の学生定員と現員（入学者数推移）（各年度、5月1日現在）

	1年		2年		3年		4年		計	
	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数
2015年度	125	135	125	140	135	145	135	166	520	586
2016年度	125	131	125	142	135	144	135	184	520	601
2017年度	125	133	125	141	135	144	135	172	520	590
2018年度	125	134	125	142	135	141	135	171	520	588
2019年度	125	131	125	139	135	149	135	160	520	579

出典：文系教務課記録

資料6 社会人学生受入状況（大学院）

	博士課程（前期課程）			博士課程（後期課程）		
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数
2017年度	14	3	3	20	14	13
2018年度	17	6	6	21	10	9
2019年度	26	13	12	13	7	7

出典：文系教務課記録

資料7 留学生受入状況（大学院）

5月1日現員	前期課程1年			前期課程2年			合 計		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
2017年度	63	2	65	—	—	—	63	2	65
2018年度	63	7	70	61	2	63	124	9	133
2019年度	71	4	75	71	7	78	142	11	153

5月1日現員	後期課程1年			後期課程2年			後期課程3年			合 計		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
2017年度	15	3	18	—	—	—	—	—	—	15	3	18
2018年度	14	5	17	14	4	18	—	—	—	28	9	35
2019年度	11	3	14	14	6	20	12	4	16	37	13	50

5月1日現員	学部研究生			大学院研究生			大学院特別研究学生		
	私費	国費	計	私費	国費	計	私費	国費	計
2017年度	—	—	—	1	3	4	6	0	6
2018年度	—	—	—	2	3	5	5	0	5
2019年度	—	—	—	1	4	5	7	0	7

出典：文系教務課記録

資料8 G30国際プログラム学生受入状況（大学院）

	「アジアの中の日本文化」			言語学・文化研究		
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数
2017年度	26	2	2	45	6	6
2018年度	36	5	5	32	8	7
2019年度	24	6	6	38	9	9

出典：文系教務課記録

資料9 G30「アジアの中の日本文化」プログラム学生受入状況（学部）

	出願者数	合格者数	入学者数	入学定員
2015年度	51	7	4	若干名
2016年度	47	5	4	若干名
2017年度	33	7	5	若干名
2018年度	40	6	3	若干名
2019年度	53	8	4	若干名

出典：文系教務課記録

資料10 3年次編入学生受入状況（学部）

経歴	入学者数							入学定員
	4年生大学卒業	短期大学卒業	高等専門学校卒業	専修学校卒業	外国大学卒業	大学在学(退学)	計	
2015年度	1	1	0	0	0	6	8	10
2016年度	4	2	0	1	0	4	11	10
2017年度	4	1	0	0	0	5	10	10
2018年度	1	1	0	1	0	7	10	10
2019年度	1	1	2	0	0	8	12	10

出典：文系教務課記録

資料11 科目等履修生、特別研究学生、研究生等受入状況（大学院）

5月1日現員	科目等履修生	特別研究学生	研究生	特別聴講学生
2017年度	2	—	5 (4)	6 (6)
2018年度	8	5 (5)	6 (5)	5 (5)
2019年度	4	7 (7)	5 (5)	9 (9)

11月1日現員	科目等履修生	特別研究学生	研究生	特別聴講学生
2017年度	6	—	9 (8)	11 (11)
2018年度	8	6	7 (7)	10 (10)
2019年度	6	6 (6)	5 (5)	7 (7)

注：研究生の括弧内は留学生で内数、特別聴講学生は短期交換留学生。

出典：文系教務課記録

資料12 科目等履修生、聴講生、研究生受入状況（学部）

5月1日現員	科目等履修生	聴講生	研究生	特別聴講学生
2015年度	8	9	7 (6)	21 (21)
2016年度	7	6	10 (10)	27 (27)
2017年度	9	5	27 (27)	40 (39)
2018年度	7	6	40 (40)	26 (26)
2019年度	7	8	33 (33)	15 (15)

11月1日現員	科目等履修生	聴講生	研究生	特別聴講学生
2015年度	9	9	26 (25)	25 (25)
2016年度	10	6	32 (32)	31 (31)
2017年度	8	5	77 (76)	41 (41)
2018年度	7	9	75 (75)	15 (15)
2019年度	6	10	71 (70)	19 (19)

注：研究生の括弧内は留学生で内数、特別聴講学生は短期交換留学生。

出典：文系教務課記録

1-3 国際化

資料13 文学部・人文学研究科が窓口となる大学間協定（2019年度末現在）

吉林大学（1985.5.23-） ハーバード・イェンチン研究所（1986.3.11-） 本浦大学校（1999.5.11-）
 ブラジリア連邦大学（1999.11.11-） スラバヤ国立大学（2000.8.1-）
 梨花女子大学校（2002.5.24-） エクス＝マルセイユ大学（2015.7.16-）

出典：文系総務課記録

資料14 文学部・人文学研究科 部局間学術交流協定（2019年度末現在）

バジャジャラン大学文学部（2001.1.8-，文学部・人文学研究科）
 北京第二外国語学院（2003.3.18-）
 韓国外国語大学一般大学院・国際地域大学院（2007.3.1-）
 東呉大学外国語学院（2009.8.6-）
 東華大学外語学院（2014.11.28-）
 上海外国語大学日本文化経済学院及び国際文化交流学院（2015.7.16-）
 西安外国語大学日本文化経済学院（2016.3.10-）
 中国人民大学外国語学院（2016.11.4-）
 天主教輔仁大学外語学院（2018.8.22-）

出典：文系総務課記録

1-4 FD

資料15 ファカルティ・ディベロップメント開催実績一覧（2019年度）

開催日	講演者	題 目
2019年6月19日	鈴木健一・松本寿弥（学生支援センター）	2019年度学生支援センターFD
2019年12月18日	中東正文（副総長）	研究費等の適正な使用について （2019年7月2日付講演の動画視聴）

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

1-5 大学院生・若手研究者等の支援

資料16 大学院生支援事業実施状況（2019年度）

事業名	前期課程		後期課程		計	助成額 (千円)
	国内	国外	国内	国外		
研究発表支援事業			6	5	11	
フィールド調査プロジェクト	1	2	3	2	8	996
計	1	2	9	7	19	431

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

資料17 TA、RA 採用実績一覧

	TA	全学 TA	RA
2017年度	100	52	12
2018年度	98	49	12
2019年度	100	63	11

出典：文系総務課記録

資料18 各種研究員等受入状況

	博士研究員	博士候補 研究員	CHT 共同研究員	TCS (JACRC 含む) 共同研究員	YLC 助教	客員研究員
2017年度	17	25	5	0	3	9
2018年度	16	20	8	0	5	18
2019年度	16	23	10	1	5	17

注：CHT＝人類文化遺産テキスト学研究センター

TCS＝超域文化社会センター（2018年度～）

JACRC＝「アジアの中の日本文化」研究センター（～2017年度）

出典：文系総務課記録

資料19 学術振興会特別研究員

	DC1	DC2	PD	RPD	計
2017年度	8	6	4	0	18
2018年度	5	3	4	0	12
2019年度	3	6	4	0	13

出典：文系総務課記録

1-6 教育の成果

資料20 教育環境の満足度調査（2019年度）

・教育環境の満足度調査の項目 1. 教室や図書室などの施設設備の満足度を教えてください。 2. シラバスや受講している授業の内容についての満足度を教えてください。 3. 所属する分野・専門の教員からの研究指導などについての満足度を教えてください。 4. 全般的にみた、本学部・研究科の教育および学習環境についての満足度を教えてください。 ・教育環境の満足度調査の結果（％）							
設問	とても満足	満 足	やや満足	普 通	やや不満	不 満	とても不満
1.	16.0	28.7	24.5	13.8	9.6	6.4	1.1
2.	20.2	48.9	12.8	12.8	4.3	1.1	0.0
3.	38.3	34.0	11.7	6.4	7.4	2.1	0.0
4.	13.8	30.9	22.3	19.1	8.5	5.3	0.0

出典：文系教務課記録

資料21 大学院生の研究業績件数

	論文発表数	学会発表数	受賞数
2017年度	7	52	0
2018年度	46	144	1
2019年度	調査中		

資料22 オープンキャンパスにおけるポスター発表

	件数
2017年度	12
2018年度	11
2019年度	12

出典：広報体制委員会記録

資料23 『名古屋大学人文学フォーラム』論文数

2017年度第1号	20
2018年度第2号	23
2019年度第3号	33

出典：『名古屋大学人文学フォーラム』各号

1-7 進路

資料24 就職活動セミナー開催実績一覧（2019年度）

開催日	名 称	講 師
2019年5月17日	インターンシップ説明会	船津静代（学生支援センター 就職相談部門）
2019年5月17日	教職セミナー2019	矢野祥一（愛知県立新川高等学校 英語科） 小沢優里（愛知県立海翔高等学校 国語科） 藤井美菜（愛知県中学校 社会科）
2019年11月20日	文学部・人文学研究科 就職セミナー 2019	○就活ー今年度の総括と来年度への準備 大上 学（株式会社マイナビ） ○インターンシップについて 船津静代（学生支援センター 就職相談部門） ○企業側から就活アドバイス 横地聖也（中部電力 日本文学2010年度卒） ○内定者から 牛島 彩（公務員 インド哲学） 小田晃之（企業 地理学）
2019年11月20日	家庭裁判所調査官業務説明会	名古屋家庭裁判所職員（名古屋大学卒業生を含む）

出典：進路・就職対策委員会資料

資料25 進路状況（2019年度、学部）

就職	民間企業	建設業	1
		製造業	20
		電気・ガス熱供給・水道業	3
		情報通信業	24
		運輸業	2
		卸売・小売業	2
		金融・保険業	5
		不動産業	0
		学術研究・専門・技術サービス	8
		宿泊業・飲食サービス業	0
		生活関連サービス業・娯楽業	2
		教育・学習支援業	1
		医療・福祉	1
		複合サービス業	0
		サービス業	2
	小 計		71
	官公庁		38
	教 員		6
	その他		0
合 計			115
大学院進学		16	
その他		5	
総 計		136	

出典：文系教務課記録

1-8 高大連携

資料26 教員による高校訪問、高校による大学訪問、出張講義等実施実績一覧

2015年度		2016年度		2017年度		2018年度		2019年度	
6月 8日	浜松市立 浜松高校	6月 6日	浜松市立 浜松高校	5月 24日	愛知県立 安城南高校	5月 24日	岐阜県立 斐太高校	5月 15日	私立 麗澤瑞浪高校
7月 2日	岐阜県立 多治見北高校	7月 1日	私立高田高校	5月 25日	岐阜県立 斐太高校	5月 30日	私立 麗澤瑞浪高校	5月 23日	岐阜県立 斐太高校
7月 3日	三重県立 桑名高校	7月 11日	愛知県立 明和高校	6月 5日	浜松市立 浜松高校	6月 4日	浜松市立 浜松高校	6月 10日	浜松市立 浜松高校
7月 13日	名古屋市立 緑高校	7月 12日	岐阜県立 多治見北高校	6月 7日	岐阜県立高校 保護者会	6月 7日	私立 愛知淑徳高校	7月 9日	愛知県立 明和高校
7月 14日	名古屋市立 向陽高校	7月 13日	静岡県立 掛川西高校	6月 15日	私立高田高校	6月 27日	愛知県立 常滑高校	7月 27日	私立聖隷クリス トファー高校
9月 7日	静岡県立 三島北高校	9月 2日	三重県立 津西高校	6月 21日	私立 麗澤瑞浪高校	6月 29日	愛知県立 大府東高校	8月 6日	愛知県立 知立東高校
9月 11日	長野県立 上田高校	10月 14日	愛知県立 時習館高校	6月 29日	静岡県立 掛川西高校	7月 6日	私立愛知高校	9月 3日	愛知県立 荻谷北高校
9月 24日	愛知県立 刈谷高校	10月 17日	愛知県立 江南高校	7月 10日	愛知県立 横須賀高校	7月 9日	愛知県立 明和高校	9月 17日	岐阜県立 多治見北高校
9月 24日	愛知教育大学 附属高校	10月 17日	愛知県立 岡崎北高校	7月 10日	愛知県立 明和高校	7月 10日	愛知県立 知立東高校	9月 20日	岐阜県立 岐阜北高校
10月 19日	愛知県立 岡崎北高校	10月 25日	愛知県立 豊橋東高校	7月 11日	岐阜県立 多治見北高校	7月 19日	私立名古屋高校	9月 27日	愛知県立 松蔭高校
10月 19日	愛知県立 江南高校	10月 26日	愛知県立 豊田北高校	7月 12日	愛知県立 知立東高校	7月 31日	名古屋市立 名古屋西高校	10月 16日	愛知県立 半田高校
10月 21日	愛知県立 豊田北高校	11月 2日	愛知県立 豊田西高校	8月 11日	愛知県立 明和高校	9月 27日	愛知県立 松蔭高校	10月 18日	私立愛知高校
10月 22日	愛知県立 半田高校	12月 6日	岐阜県立 多治見北高校	9月 11日	岐阜県立 岐阜北高校	10月 12日	愛知県立 時習館高校	10月 21日	愛知県立 岡崎北高校
11月 5日	愛知県立 豊田西高校	12月 12日	愛知県立 西尾高校	9月 13日	愛知県立 松蔭高校	10月 15日	愛知県立 江南高校	10月 28日	愛知県立 江南高校
11月 18日	三重県立 四日市高校			9月 30日	三重県立 四日市高校	10月 22日	愛知県立 岡崎北高校	10月 29日	私立南山高校・ 中学男子部
12月 9日	私立愛知高校			10月 3日	私立南山高校・ 中学男子部	10月 23日	私立南山高校・ 中学男子部	10月 31日	愛知県立 西尾高校
				10月 5日	名古屋大学教育 学部附属高校	10月 24日	愛知県立 豊田北高校	11月 7日	愛知県立 豊田西高校
				10月 16日	愛知県立 江南高校	11月 1日	名古屋市立 菊里高校	11月 12日	岐阜県立 多治見北高校
				10月 16日	愛知県立 岡崎北高校	11月 8日	愛知県立 豊田西高校	11月 13日	愛知県立 豊田北高校
				10月 19日	愛知県立 半田高校	11月 9日	愛知県立 半田高校	11月 22日	愛知県立 半田東高校
				10月 23日	愛知県立 大府東高校	11月 15日	愛知県立 西尾高校	1月 21日	名古屋市立 菊里高校
				10月 25日	愛知県立 豊田北高校	12月 6日	名古屋市立 名古屋西高校		
				11月 2日	愛知県立 豊田西高校	1月 11日	私立土佐塾 中学・高校		

2015年度		2016年度		2017年度		2018年度		2019年度	
				11月 9日	名古屋市立 菊里高校	3月 12日	福井県立 藤島高校		
				11月 10日	愛知県立 半田高校				
				11月 15日	愛知県立 西尾高校				
				3月 13日	福井県立 藤島高校				

注：今年度より、高校訪問と大学訪問、保護者向けを区別せず列記。

出典：文系教務課記録・広報体制委員会議事録

2. 研究の現況

2-1 研究の成果

資料27 教員の研究活動状況に関する資料

	著者数※1		招待論文数		査読付き論文数		その他※2
	日本語	外国語	日本語	外国語	日本語	外国語	
2016年度	31 (6)	8 (1)	16	5	29	26	221
2017年度	39 (7)	5 (2)	31	1	33	16	226
2018年度	23 (7)	9 (0)	33	9	14	32	302
2019年度	28 (6)	12 (3)	36	14	29	21	275

※1 著書数については、内数（カッコ内）として「単著」の数を記載。

※2 学会発表や「査読付き論文」に当たらない論文などについては、「その他」としてカウント。

資料28 国際／国内研究集会開催状況

	国際研究集会件数	国内研究集会件数
2017年度	14	13
2018年度	19	17
2019年度	16	16

資料29 共同研究実施状況

経 費	授業料	科学研究費 補助金	名古屋大学 全学諸経費	文学研究科 プロジェクト経費	その他
2017年度	3	30	0	2	20
2018年度	2	39	0	4	31
2019年度	6	57	10	6	46

資料30 海外における調査・フィールドワーク件数

実施国	2017年度	2018年度	2019年度	実施国	2017年度	2018年度	2019年度
アメリカ	1	6	3	タイ		1	
イギリス	1	1	5	台湾	2	5	4
イタリア	1	1	1	タジキスタン	1		
インド	1			中国	3	7	5
インドネシア	1	1		ドイツ		2	2
ウズベキスタン	1			トルコ			1
エジプト	1	1	1	ニカラグア		1	
エルサルバドル	1	2	2	ノルウェー			1
オーストリア		1		フィリピン	1	1	1
韓国		4	2	フランス	2	2	6
ギリシャ	2		1	ホンジュラス		1	
キルギス			1	メキシコ	1		1
グアテマラ	1	1	1	ラオス	1		1
クロアチア	1			リトアニア	1		
スイス		1		ロシア	1	1	1
スペイン		1	1				

資料31 研究会実施回数

学会・研究会の名称	2017年度	2018年度	2019年度
奥田靖雄翻訳プロジェクト研究会	10	8	1
中国ジェンダー研究会	3		
フォーコー研究：人文科学の再批判と新展開	5	10	6
イマージュ論研究会	1		3
名古屋大学会話分析データセッション	11		12
日本アメリカ史学会第14回年次大会（実行委員長）	1		
名古屋大学英語学談話会	10	10	10
「身体と記憶の共鳴」研究会	2	3	
The S.E.P.C (The Seminar on English Poetry and Criticism)	1		
名古屋平安文学研究会	2	2	2
リーディング・語彙研究会	12	12	
日本語教育研究集会	1	1	1
「日本言語文化研究」学術研究会	1	1	
上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会	1	1	
フローベール研究会	1		
名古屋音声研究会	13	13	10
ブルースト研究報告会	2		
名古屋・言語研究会	11	11	5
名古屋大学国語国文学会	2	2	2
Nagoya Iconicity in Language and Literature Society (NILLS)	10	10	1
相互行為のポインティング研究会	2		
「地域と宗教」研究会		3	
フェミニズム・ジェンダー読書会		6	7
1930年前後左翼運動の文化実践におけるジェンダーとセクシュアリティ		2	3
1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究		1	3

学会・研究会の名称	2017年度	2018年度	2019年度
古代アメリカ学会西日本部会		2	
考古学研究会東海例会		1	
ドイツ社会国家研究会		4	
テキストの中の文法研究会		2	
アリコス考古学プロジェクト2018		1	
賢愚経研究会		9	6
スイス科研研究会		5	
先導的人文学研		6	3
会話分析データセッション		9	
言語の類型的特点をとらえるための対照研究会		3	
歴史教育研究会		1	1
東海縄文研究会		1	
東アジアと同時代日本語文学フォーラム		1	1
古書の会			11
象徴天皇制研究会			4
名古屋大学西洋古典研究会			1
仏教教学研究会			5
日中文献交流史研究会			6
比較人文学研究会			15
中世史研究会			10
中国語文献の会			1
中国社会研究会			6
日本フランス語フランス文学会中部支部大会			1
ボルヘス原書読書会			30
「訳官使・通信使とその周辺」研究会			3
六度集経研究会			3
「言説と情動」研究会			5
「予測を生み出す推論」研究会			3
名古屋大学東洋史研究会大会			1
「地域と宗教」研究会			2
名古屋哲学フォーラム			1
中部人類学談話会			5

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

2-2 研究資金の状況

資料32 科学研究費等受入状況

		新規採択	継続採択	合 計
2017年度	件 数	14件 (うち基盤S：0件 基盤A：0件)	70件 (うち基盤S：1件 基盤A：1件)	84件 (うち基盤S：1件 基盤A：1件)
	直接経費	18,500,000円	114,923,156円	133,423,156円
	間接経費	6,060,000円	28,950,000円	35,010,000円
	合 計	24,560,000円	143,873,156円	168,433,156円
2018年度	件 数	18件 (うち基盤S：0件 基盤A：2件)	55件 (うち基盤S：1件 基盤A：0件)	73件 (うち基盤S：1件 基盤A：2件)
	直接経費	31,300,000円	80,600,000円	111,900,000円
	間接経費	9,390,000円	24,180,000円	33,570,000円
	合 計	40,690,000円	104,780,000円	145,470,000円
2019年度	件 数	23件 (うち基盤S：0件 基盤A：0件)	48件 (うち基盤S：0件 基盤A：2件)	71件 (うち基盤S：0件 基盤A：2件)
	直接経費	37,500,000円	53,800,000円	91,300,000円
	間接経費	11,250,000円	16,140,000円	27,390,000円
	合 計	48,750,000円	69,940,000円	118,690,000円

出典：文系経理課記録

資料33 寄付金等受入状況（2019年度）

種 別	課題名	出 所	代表者	受入金額
寄付金		公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団	村田 光司	1,000,000 円
寄付金		名古屋大学文学部親和会	人文学研究科	2,018,714 円
寄付金		公益財団法人日本科学協会	村田 光司	570,000 円
寄付金		公益財団法人大幸財団	加藤 靖恵	150,000 円
寄付金		公益財団法人大幸財団	河西 秀哉	70,000 円
寄付金		公益財団法人村田学術振興財団	重見 晋也	300,000 円
寄付金		公益財団法人村田学術振興財団	大島 絵莉香	150,000 円
寄付金		公益財団法人豊秋奨学会	梶原 義実	1,100,000 円
寄付金		公益財団法人大幸財団	小川 翔太	600,000 円
寄付金		名古屋大学全学同窓会	梶原 義実	450,000 円
寄付金		公益財団法人大幸財団	藤木 秀朗	100,000 円
寄付金		公益財団法人ロッテ財団	畑 有紀	800,000 円
寄付金		公益財団法人ヒロセ国際奨学財団	程 永超	1,000,000 円
受託研究	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 グローバル展開プログラム	独立行政法人日本学術振興会	阿部 泰郎	4,914,000 円
共同研究		学校法人椋山女学園	梶原 義実	0 円
受託事業	研究拠点形成事業 A. 先端拠点形成型	独立行政法人日本学術振興会	阿部 泰郎	14,025,000 円
受託事業	二国間交流事業共同研究・セミナー	独立行政法人日本学術振興会	加藤 久美子	2,254,286 円
受託事業	受託員 内地研究員	香川高等専門学校	木下 徹	150,000 円
補助金	科学技術人材育成費補助金	独立行政法人日本学術振興会	近本 謙介	31,610,000 円
補助金	研究大学強化促進事業 (最先端国際研究ユニット 代表研究者)	文部科学省（学内配分）	近本 謙介	3,540,000 円

補助金	研究大学強化促進事業 (最先端国際研究ユニット 構成研究者)	文部科学省（学内配分）	梶原 義実	200,000 円
補助金	研究大学強化促進事業 (最先端国際研究ユニット 構成研究者)	文部科学省（学内配分）	程 永超	610,000 円

出典：文系経理課記録

資料34 名古屋大学教育奨励費採択状況

	プロジェクト名	代表者	配分額
2017年度	文化資源調査研究者養成プロジェクト	古尾谷 知浩	379,000円
2018年度	文化資源調査研究者養成プロジェクト	古尾谷 知浩	287,000円
2019年度	廃 止		

出典：文系経理課記録

資料35 人文学研究科教育実施経費配分状況（2019年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
西洋古典学の授業全体	西洋古典学	121,500 円
日本史博物館実習Ⅰ	日本史学	35,000 円
文化資源学研究Ⅰ	日本史学	28,000 円
文化資源学研究Ⅲ	日本史学	82,000 円
美術史実習Ⅱa、Ⅱb（新） 2A、2B（旧）	美学美術史学	528,750 円
考古博物館実習Ⅰa、Ⅰb、Ⅱa、Ⅱb 文化資源学	考古学	400,000 円
宗教人類学基礎演習 a 文化人類学フィールド実習Ⅰa	文化人類学	731,562 円
宗教人類学基礎演習 b 文化人類学フィールド実習Ⅰb	文化人類学	509,046 円
文化人類学フィールド入門実習Ⅰ	文化人類学	90,054 円
日本文化フィールドワーク実習 a	文化人類学	158,520円
アーカイヴス・テキスト学フィールドワーク実習 日本文化フィールドワーク実習 b	文化人類学	284,500円
一般博物館実習（館園実習） 一般博物館実習（実務実習）	博物館学	90,000 円

出典：文系経理課記録

資料36 人文学研究科プロジェクト経費配分状況（2019年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
考古学収蔵庫保管資料の文理融合型大学院教育への共同活用	山本 直人	373,500 円
言語学・応用言語学分野の共同研究教育体制の強化に関する共創プロジェクト	堀江 薫	393,300 円
日中学術交流推進プロジェクト	鷲見 幸美	500,000円
国際シンポジウム「英語圏文学・文化と「社会変動」Ⅴ」	長畑 明利	399,600 円
台湾大学・名古屋大学第6回大学院生研究交流集会	飯田 祐子	94,500円
中米の文化遺産の調査・保存・活用に関する学術交流推進プロジェクト	伊藤 伸幸	336,750円

出典：文系経理課記録

2-3 研究成果の社会還元

資料37 社会還元活動実施状況

	2017年度	2018年度	2019年度
市民向け講演・公開シンポジウム、カルチャースクール等	78	73	90
新聞記事の掲載・テレビ出演等	21	41	104
高等学校への出張授業等	27	24	21
その他	4	15	18

資料38 地域連携活動一覧

	種 別	内 容	成果物
2017年度	自治体史等	愛知県史、新修豊田市史、西尾市史、小松市史	『愛知県史』通史編2中世1、『愛知県史』通史編3中世2・織豊
	文化財調査事業等	文化庁、愛知県、名古屋市（2件）、豊田市、一宮市、稲沢市、刈谷市、東栄町	
	博物館美術館等	東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、国立西洋美術館、名古屋市博物館、岡崎市美術館、稲沢市荻須記念美術館、西尾市岩瀬文庫	展示図録『こんな本があった！—岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展15—』／西尾市岩瀬文庫
2018年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史	『愛知県史』通史編5近世1、鳥取県史ブックレット
	文化財調査事業等	奈良文化財研究所、名古屋市、豊田市（2件）、稲沢市、刈谷市	
	博物館美術館等	国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館、岡崎市、稲沢市美術館	
2019年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史、鳥取市史	
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、稲沢市、刈谷市、豊川市、大垣市、設楽町、東栄町、豊根村	
	博物館美術館等	東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館（2件）、岡崎市美術館、稲沢市荻須記念美術館、一宮市博物館、西尾市岩瀬文庫	
	その他団体	北設楽花祭保存会、東海ジェンダー研究所、国立女性教育会館、特定非営利活動法人難民支援室	

編集委員

古 尾 谷 知 浩

星 野 幸 代

池 内 敏
(教育研究推進室室長)

梶 原 義 実

宮 地 朝 子

宇 都 木 昭

(アルファベット順)

年報2019 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

2020年8月31日発行

発行 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL (052) 747-6391

組版 株式会社 あるむ

〒460-0012 名古屋市中区千代田3-1-12
TEL (052) 332-0861
